

Ⅱ 植 生 概 観

下北半島は、その全域がブナクラス域（夏緑広葉樹林域）に属しており、森林植生のおもな構成種はブナ、ミズナラ、カシワ、イタヤカエデなどの夏緑広葉類で占められている。とくに、ほぼ全域が裏日本気候域に支配されていることから、これらの森林植生の林床には、チシマザサ、クマイザサ、オオバクロモジ、ハイヌガヤ、ハイイヌツゲ、ヒメモチなどの、常緑生低木類を含む裏日本気候域の指標種群が多く生育している。

下北半島の中、北部に位置している下北丘陵や恐山―燧火山群の山岳地帯では、現存植生として、この地方の代表的自然林であるブナ林、ミズナラ林、およびブナとヒノキアスナロの混交林が、とくに国有林を中心として残存している。この山岳地帯の山頂付近で、母岩の露出する屋根部や風衝地では、キタゴヨウとヒノキアスナロの混交林や、コメツツジ、ホツツジ、マルバシモツケなどによる風衝低木林（釜臥山）の発達が認められる。山岳地帯の溪谷部においては、溪谷林であるジュウモンジシダ―サワグルミ群集の発達が認められ、ヒノキアスナロが高木層に混生している群落が多い。

山地の中腹以下や、とくに、斜面のゆるやかな山岳地では、多くは代償植生によって占められ、森林植生ではミズナラ、コナラ、あるいはカシワによるナラ林が認められる他、クロマツ（一部アカマツ）やスギの針葉樹類による人工造林地が目立っている。また、一部では放牧地として利用され、カモガヤ等の牧草群落や、シバ群落の草本植物群落がひろがっている。とくに火山灰台地の広く広がる南部の上北丘陵地では、放牧地がとくに多く、広い放牧地と、一部畑作地がひろがっている。この放牧地の周囲には、クロマツの造林地やコナラ林の雑木林がひろがるという下北地方独特の人為文化景観を形成している。沖積低地は、これらの山地や、台地の中に谷状に入り組んで発達しているが、面積的には狭く、とくに下北半島北部の田名部低地と、南部の小川原湖周辺に沖積低地がまとまった拡がりをもってひろがっている。この沖積低地では、そのほとんどが水田として利用されているが、狭い谷部の水田や、半島北部では、現在耕作の放棄された水田が多い。また沼地の周辺を中心にヨシや大型スゲによる低層湿原植生が各地で認められる他、田名部低地では、沖積低地の過湿立地上での森林植生としてハンノキ、ヤチダモ等による森林植生の発達が認められる。また沖積低地の各所には、点在する大小の湖沼が数多くあり、これらの低層湿原植生や、湿生林は、量的拡がりも大きい。また湖沼内にもジュンサイやヒルムシロ、コウホネの他マツモ、クロモ、ホザキノフサモ、タスキモなどの浮葉沈水植物も多く、きわめて多様な湿生草本植物群落が生育している。とくに太平洋側にある長大な猿ヶ森大砂丘や、天ヶ森砂丘地に発達する砂丘後背湿地では、水田としても利用に不適な場所が多い。この砂丘後背湿地ではヒライ、ショウジョウスゲ、シカクイ、ヤマイ、ハリコウガイゼキショウ、ホタルイ、ヤチカワズスゲ、ミタケスゲ、ムジナスゲなどの多くのカヤツリグサ科植物やヨシ、イワノガリヤス、

ヤマアワ、カモノハシ、チガヤ、ススキなどのイネ科植物、さらに花の目立つ、ノハナシヨウブ、カキツバタ、ヒオウギアヤメ、ニッコウキスゲ、サワギキョウ、エゾリンドウ、タチアザミ、ニッコウキスゲなど多くの湿生草本植物種群によって構成される多様な湿地植物群落が発達している。

また、砂丘後背湿地の一部や、河川の河口部の海水の出入する地域では、ウミミドリ、シバナ、ツルヒキノカサなど、多肉質の小型植物による塩沼地植生が発達しており、とくに南部の天ヶ森砂丘地帯に多い。鷹架沼や尾駁沼の河口部ではアマモ、コマモによる塩沼地植生が発達している。

太平洋岸にあり、南北 100km におよぶ長大な砂丘地帯では、砂丘上ではハマニククワコウボウムギ群集、ハマニククワオニンバ群集などの代表的な北地型の砂丘上草本植物群落や、ハマナスーハイネズ群集の低木群落が良く発達し、海岸汀線に平行して、みごとな帯状分布をしている。砂丘の後方にほとんどがクロマツ、あるいはオオバヤシヤブシによる防風砂林が形成されている。むつ湾側の海岸では、海岸段丘が陸海岸汀線近くに迫り、砂丘植生の発達はきわめて小規模であるが、冬季期の季節風の影響が強く、カシワの風衝低木林が、このむつ湾側に集中して分布しているのが特徴的である。